

# Adiposity reboundの生理学的意義と発達障害との関連

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD学会 公開日: 2022-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 市川, 剛 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/00003964">http://hdl.handle.net/10271/00003964</a>

第 10 回日本 DOHaD 学会

<ワークショップ 2>

### Adiposity rebound の生理学的意義と発達障害との関連

獨協医科大学医学部小児科学講座

市川 剛

Adiposity rebound (以下 AR) は 1984 年にフランスの Rolland-Chachera 先生が提唱した概念である。BMI が出生後 6–12 ヶ月にかけて上昇し、頂値 (adiposity peak) を呈した後低下し、一般に 5–7 歳で再度上昇するその現象のことを指す。このタイミングが 5 歳未満と早期であると、その後の肥満やメタボリック症候群、高血圧、脂質異常、糖尿病などのリスクを高めることが明らかになっている。この現象が何を反映するかは諸説あるが、乳幼児期の体組成の変化、早熟傾向を表していると考えると理解しやすい。ポイントとしては、太り始める時 (AR の時期) の体格はあまり関係なく、むしろその時点で BMI が低い方が将来のリスクが高いという報告も多い。また、その時期の生活習慣と AR の時期は関連していることも興味深い。さらに、自閉症スペクトラム障害は肥満のリスクが高いとされている。また、難治性の高度肥満でも自閉症を合併していることが多い印象である。

ところで、自閉症スペクトラム障害などの神経発達症 (発達障害) の児は近年世界的に増加している。また、その原因としては環境因子の影響が強いことが年々明らかになってきている。一方で、胎児期の薬物暴露などいくつかの環境要因は指摘されているものの全体像は明らかではない。

今回、乳幼児期の体格の変化の指標である AR が自閉症スペクトラム障害の発症因子として関与しているかを検討した。その結果を踏まえ、幼少期の生活習慣と神経発達症の発症に因果関係があるのかという点も踏まえ考察する。